

シャーロット・ブロンテ『ヴィレット』における 一人称の語りの複雑性

間仁田 彩未

19世紀の女性作家シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) による生前最後の作品『ヴィレット』 (*Villette*, 1853) の主人公ルーシー・スノウは、ブロンテの初期作品『ジェイン・エア』 (*Jane Eyre*, 1847) の主人公ジェイン・エアと比較すると控えめな性格であり、一見すると、当時のジェンダー規範に則っているように見える。また、『ヴィレット』の特徴である複雑で曖昧な語りも相まって、『ジェイン・エア』に比べて評価されないことがあり、ブロンテの代表作としても『ジェイン・エア』が挙げられることが多い。しかし、20世紀の女性作家ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) をはじめとする先行研究では、『ヴィレット』はブロンテの作品中で最もフェミニズム的で優れた作品と評価されることもある⁽¹⁾。では、具体的に『ヴィレット』のどのような点が評価されているのだろうか。本報告では、『ヴィレット』における一人称の語りの複雑性に注目し、先行研究をもとにその意義を考察する。そのため、まず『ジェイン・エア』における女性主人公の特徴について確認する。

1

『ジェイン・エア』は一人称の語りで進行し、孤児として厳しい境遇で育ち、ガヴァネスとして働く主人公ジェイン・エアと、地位と財産で彼女を凌ぐ雇い主エドワード・ロチェスターとの身分違いの恋が描かれている。「家庭の天使」像に象徴されるように、当時の女性たちは自己表現を許されず、男性に従順であることが求められていた。しかし、このような家父長制度が支配するイギリス社会において、ジェインは従順な淑女の役割を拒否し、対等な関係と自由を求める。特に、ロチェスターとの関係においても彼女は自身の価値観を曲げることなく、一貫して自立心を示す。これは、当時の大人しく受動的な女性像と

は異なり、ジェインは社会的・経済的に自立を目指す新たな女性の象徴として捉えられている。また、先行研究では、物語の結末において、事故で財産を失い障害を負ったロチェスターと、身内の遺産を得たジェインが結ばれることが、男女平等の象徴として評価されている⁽²⁾。しかし、物語の中で描かれるロチェスターの言動やその関係性の変化を考えると、本当にそう言い切れるのだろうか。

ロチェスターとジェインは互いに対等でいられる相手として惹かれ合う。しかし、ロチェスターの支配欲が明らかになる場面や、隠されていた妻バーサ・メイスンの存在を告白する場面において、ジェインはその事実を受け入れることができず、一度彼の元を去る。その際、ロチェスターが“Jane! will you hear reason? … because, if you won't, I'll try violence?” (*Jane Eyre* 271) と述べる場面には、ジェインの意思を尊重するかのように見えながらも、最終的には力に訴えてでも従わせようとする彼の家父長的な価値観が表れている。また、愛する相手であるジェインに対してさえ、自身の価値観や立場を押し付けようとするロチェスターの姿勢が示されている。もしジェインがここで彼を完全に拒絶し、二人が結ばれることのない結末を迎えていたとしたら、『ジェイン・エア』は女性の優位性を説く物語として解釈されたかもしれない。あるいは、最終的にロチェスターは障害を負い、財産や家庭（妻バーサ）を失う一方で、ジェインは独立した財産を得るこの構図だけを見れば、ジェインが経済的・社会的にロチェスターを超越する立場に立つことから、女性が男性に復讐する物語として解釈される可能性もある。しかし、この物語が単に女性の優位性や復讐劇を描くものにとどまらないのは、ジェインが示す「寛容の精神」(forbearance)にあると考えられる。

「寛容の精神」とは、ジェインが幼少期に通っていた寄宿学校で友人ヘレン・バーンズから学んだもので、全面的に受け入れるのではなく、折り合いをつける姿勢を意味する。この「寛容の精神」を持つヘレンが、理不尽に罰を受けても平静を保つ姿を見て、ジェインは次のように疑問を抱く。

“Why,” thought I, “does she not explain that she could neither clean her nails nor wash her face, as the water was frozen?” (*Jane Eyre* 51)

これに対してヘレンは、運命において避けられない苦しみを受け入れる「寛容の精神」について、次のように述べる。

“Yet it would be your duty to bear it, if you could not avoid it: it is weak and silly to say you cannot bear what it is your fate to be required to bear.” (*Jane Eyre* 53)

しかしジェインは、孤児として虐げられた経験から、ヘレンの態度を理解できずにいた。

“I could not comprehend this doctrine of endurance; and still less could I understand or sympathise with the *forbearance* she expressed for her chastiser.” (*Jane Eyre* 53、強調は引用者)

このように、ヘレンから学んだ「寛容の精神」(*forbearance*)を用いて、ジェインはロチェスターの過去や行いを表面的に受け入れ、二人の関係を新たに築く道を選んだ。二人の結婚という結末は、単にフェミニズム的な男女平等を示すだけでなく、「寛容の精神」によって、二人の結びつきを可能にしたのだろう。

また、ヘレンは「家庭の天使」像を体現する従順で受動的な女性として描かれ、当時のジェンダー・ロールに囚われた女性たちの象徴ともいえる。ヘレンは肺結核にかかり亡くなってしまったブロンテの姉がモデルであり、伝記的に基づくものとも言われるが⁽³⁾、ヘレンが結核により命を落とすという結末は、こうした役割に徹する女性たちの姿勢に対するブロンテの批判が示唆されているのではないだろうか。つまり、自伝的要素を含む『ジェイン・エア』を通じて、ブロンテは内に秘めた反骨精神を表現しているということだ。

そして、家父長制に対するブロンテの憤りは、次に引用するジェインの発言からも読み取ることができる。

Women are supposed to be very calm generally: but women feel just as men feel; they need exercise for their faculties and a field for their efforts as much as

their brothers do; they suffer from too rigid a restraint, too absolute a stagnation, precisely as men would suffer; and it is narrow-minded in their more privileged fellow-creatures to say that they ought to confine themselves to making puddings and knitting stockings, to playing on the piano and embroidering bags. It is thoughtless to condemn them, or laugh at them, if they seek to do more or learn more than custom has pronounced necessary for their sex. (*Jane Eyre* 100)

ブロンテの『ジェイン・エア』における家父長制への憤りは、ジェインを通じて強く表現されており、この姿勢こそが、ブロンテが女性の自由と自立を求めた証である。しかし、その憤りは単なる男性への攻撃として描かれるのではなく、「寛容の精神」として抑制され、ジェインの内面的な強さに支えられながら結婚というハッピーエンドを迎えることで、時代を超えて多くの読者に響くメッセージとなり、作品が高く評価されているのではないだろうか。

2

一方、ヴァージニア・ウルフは上でみた引用に対し、男性に対するブロンテの憤りは読者を惹きつける魅力であると評価しながらも、次のように批判をする。

She will write in a rage where she should write calmly. She will write foolishly where she should write wisely. She will write of herself where she should write of her characters. She is at war with her lot. (*A Room of One's Own* 63)

Now, in the passages I have quoted from JANE EYRE, it is clear that anger was tampering with the *integrity* of Charlotte Bronte the novelist. She left her story, to which her entire devotion was due, to attend to some personal grievance. She remembered that she had been starved of her proper due of experience-she had been made to stagnate in a parsonage mending stockings when she wanted to wander free over the world. Her imagination swerved from

indignation and we feel it swerve. (*A Room of One's Own* 66)

ウルフによれば、作者自身の感情が主人公ジェインを通じて、過度に反映されているという。つまり、ジェインはブロンテの代弁者となっており、作者と語り手の距離が近すぎることで、読者が登場人物を自立した存在として認識することが難しくなっている。それに対してウルフは、同じ19世紀の作家であるジェイン・オースティンやトルストイが示すように、登場人物が作者の手から離れ、それぞれが独自の視点を持ち、物語の中で自らの人生を歩んでいるかのように感じられる作品こそが、より優れたものであると主張する。

The characters of a Jane Austen or of a Tolstoi have a million facets compared with these. They live and are complex by means of their effect upon many different people who serve to mirror them in the round. They move hither and thither whether their creators watch them or not, and the world in which they live seems to us an independent world which we can visit, now that they have created it, by ourselves. (*"Jane Eyre and Wuthering Heights"* 186)

一見すると、ブロンテが家父長制に対する怒りを、登場人物を通じて表現することは、彼女の率直で誠実な姿勢を示しているようにも見える。しかしウルフは、ブロンテの感情が物語の自然な流れやキャラクターのリアルな描写を妨げている点に注目し、冷静さや客観性を欠いているとし、これを「誠実」(*integrity*) でないと評価しているのではないだろうか。

さらに、ウルフは作家の物語構成に関して、次のように述べている。

A novelist, we reflect, is bound to build up his structure with much very perishable material which begins by lending it reality and ends by cumbering it with rubbish. (*"Jane Eyre and Wuthering Heights"* 185)

これは、作家が物語を構築する際、変わりやすく不安定な時代の流行や価値観、社会環境といった要素を用いることで一時的なりアリティを生み出せる一方で、それが物語の全体性や普遍性を損なうリスクを含んでいることを示唆し

ている。この指摘から、ウルフは現実世界の複雑性を描くには単一の視点だけでは不十分であり、より多角的な視点や多面的なキャラクター描写が必要だと考えていたことが考えられる。したがって、ウルフは『ジェイン・エア』が単一の視点に偏りすぎていることでキャラクターの複雑さに欠け、形式的に優れていないと批判しているのではないだろうか。しかし、ブロンテがその課題を克服し、多面的な視点で登場人物を描写したのが『ヴィレット』であり、ウルフはこれを“her finest novel” (“*Jane Eyre and Wuthering Heights*” 188) と高く評価している。

3

ここで、ウルフがブロンテの最高の小説だと高く評価する作品、『ヴィレット』をみていきたい。『ヴィレット』は『ジェイン・エア』と同様に一人称で語られる物語であるが、語り手であり主人公でもあるルーシー・スノウはジェインとは対照的に、控えめで内向的な女性である。友人も家族もないルーシーは、イギリスを離れてヴィレットという小さな町の女子全寮制学校で職を得る。そこで彼女は、手に負えない生徒たち、教員を厳しく監視する女性の校長、そして自身の複雑な感情に向き合うことになる。最初は学校の英国人医師であるドクター・ジョン（彼は物語が進むことで幼馴染のグレアム・ブレトンであるとわかる）に、次いで独裁的な教授ポール・エマニュエルに惹かれながらも、冷静さを保とうと奮闘する。報われない愛に苦しみつつ逆境に直面しながらも、自立心を失わずに生き抜こうとするヒロインが描かれた物語である。

『ヴィレット』はルーシーの寡黙さや彼女についての情報が詳しく語られない曖昧さが特徴的な作品であるが、これは女性が家父長制度から逃亡することへのブロンテの諦めを示唆しているというわけではない。ジェインほど明確な自己主張はないものの、彼女からも家父長制に対する抵抗が感じられる部分が見られる。そこで、ウルフが詳しく説明しなかった『ヴィレット』を高く評価する理由について、『ヴィレット』の語り手と読者との関係について論じた Gregory S. O'Dea の論文を参考に考察していく。

ルーシーはジェインと比べて控えめな女性であり、一見、当時のジェンダー規範に則っているようにも見える。『ジェイン・エア』ではジェインの分身と

も言われるロチェスターの隠された妻バーサが精神的疾患を患い男性（ロチェスター）に反抗する理由から、屋根裏部屋に閉じ込められており、このことは先行研究で彼女を屋根裏の狂女と示すように、「家庭の天使」という社会要請に応えられない女性の運命を示唆している。同じように、ルーシーも男性（ポール・エマニュエル）によって、劇の役の練習をさせるためにと学校の屋根裏部屋に閉じ込められてしまう。O'Dea が指摘するように、ルーシーはバーサとは異なり、自分が台詞を覚えていなかったことを恥じるだけで、屋根裏部屋に閉じ込められ、そして放置された状況に怒りを見せることはない。

しかし、ルーシーは結婚という当時の女性にとっての幸せを掴み取ることなく、『ヴィレット』は曖昧な結末を迎える作品である。前述したように、『ジェイン・エア』では事故により財産を失い障害を負ったロチェスターと身内の遺産を得たジェインが結ばれる結末で男女平等を叶えたとも言われているが、ルーシーは自分の学校を創立し運営することから、確かにエマニュエルからの援助を受けてはいるものの、彼女は男性に完全に依存していないことがわかる。よってこの結末は、『ジェイン・エア』とは異なる「家庭の天使」像へのブロンテの静かな抵抗であるとも読み取ることができる。

さらに、O'Dea によれば、登場人物としてのルーシーは弱々しく受動的で内気な性格を見せるが、語り手としてのルーシーは読者、そして時折ポールに対してのみ、意見を主張したり恨みを抱いたりするという。確かに、ルーシーがマダムベックの寄宿学校で教師として働き始めたばかりの頃、マダムベックによって手荷物をスパイされた際に内心怒りと悲しみに襲われるも、“Let bygones be bygones. I am unharmed: why should I bear malice?” (*Villette* 132) と独り言を呟いて終わる。しかし、語り手のルーシーは O'Dea の言うように、グレアム・ブレトン（ドクター・ジョン）への愛情について激しく否定し、次のように読者を侮辱している。

I disclaim, with the utmost scorn, every sneaking suspicion of what are called 'warmer feelings:' women do not entertain these 'warmer feelings' where, from the commencement, through the whole progress of an acquaintance, they have never once been cheated of the conviction that to do so would be to commit a mortal absurdity: nobody ever launches into Love unless he has seen or

dreamed the rising of Hope's star over Love's troubled waters (*Villette* 282)

ルーシーは、恋愛感情を持つことの愚かさを強く断言し、恋愛が成り立つためには、まず「希望の星」(Hope's star) が現れるべきだと述べる。このような挑発的な語りは、彼女の感情の複雑さを浮き彫りにし、読者に対して心理的な距離を生じさせてしまう。

従来の小説は、語り手が読者に対し、どのような見方をするべきか誘導してきた。つまり、語り手は読者に考える暇を与えず、語り手の見解に基づいて物語を進め、主導権を握る。従って、本来ルーシーは読者が共感し同一視すべき登場人物、そして導き手であるべきはずだが、ルーシーの持つ矛盾した性質は読者を混乱させる要素であり、この二重の性質は『ヴィレット』が複雑で難しいと評価されてしまう要因となっている。しかし、これらはブロンテが意図的に創り出したものである。ではなぜ、彼女はわざと読者から複雑な反応を引き起こすように設定したのだろうか。それは、近づき難いと定義された個人をいかに近づき易くするか、そして、読者と語り手の不調和な要素からある種の調和が生まれるようにすることだと O'Dea は考える。つまり、曖昧な語りは読者にとって不調和なもので、意図的に読者を混乱させるような要素として働きながらも、この不調和は単なる混乱を与えるだけのものではなく、読者に考察を促し、調和を生み出す役割を果たしているということなのだろう。実際に、語り手は読者を導くガイドであるという従来の形式に反する語りは、次のような引用にみられる。

Reader, if in the course of this work, you find that my opinion of Dr John, undergoes modification, excuse the seeming incon-sistency. I give the feeling as at the time I felt it; I describe the view of character as it appeared when discovered. (*Villette* 214)

物語の冒頭で彼女について何も語られないことに加え、重要な情報の省略によって読者は、ガイドは役立つ存在ではなく疑わしい存在であると混乱してしまうだろう。しかし O'Dea は、このような「信頼できない語り手」(Unreliable narrator) をブロンテは用いて、一貫して物語を導く語り手であると同時に、欠

陥のある一貫性のない登場人物にもなり得るという複雑さを表現し、読者からの複雑な反応を引き出すことで、人間の精神の深さと独自性を強調しているという。『ジェイン・エア』におけるジェインの語りは、幼少期の虐待を乗り越え、結婚し、幸せを勝ち得た状態での安定さを持ち、共感によって引き込まれるような語りによって読者と語り手の関係は落ち着いている。その反面、O'Deaによると、このようなジェインの物語は「自己提示の物語」(self-presentation) (Jacobus 45) であるのに対し、ルーシーの物語は「自己検討の物語」(self-examination) (Jacobus 45) であるように、ルーシーの場合は自分自身のこととがまだよくわからない未完成な語り手である。

これまでに見てきたように、O'Dea はルーシーの二重性に注目し、彼女が物語を導く語り手であると同時に、一貫性を欠いた不安定な登場人物としての性質を併せ持つことを指摘している。ルーシーの曖昧で矛盾を含む語りは、読者を混乱させる一方で、人間の精神の深さや独自性を強調する役割を果たしている。また、語り手としてのルーシーが読者に与える影響は、彼女自身の複雑な内面と密接に結びついているといえる。

しかしその一方で、フェミニスト批評家の Mary Jacobus は、登場人物としてのルーシー自体にも二重性があることを強調している。彼女の指摘によれば、この二重性は彼女が物語上で執筆する手紙に現れているという。例えば、ルーシーがグレアムに送った二通の手紙には、理性的で抑制的な表現と、自由で感情的な表現が交錯しており、この点がルーシーの多面性を象徴している。そこで、今後の研究では、O'Dea と Jacobus の指摘を踏まえ、ルーシーの語りとキャラクターにおける二重性を詳しく分析する。語り手としてのルーシーの曖昧さが読者との関係にどのような影響を与えるのか、また登場人物としての彼女の理性と感情の交錯が物語のテーマや構造とどのように結びついているのかを探ることで、ルーシーというキャラクターの複雑さが『ヴィレット』全体の評価にどのように影響を与えているのかを考察し、作品の文学的意義を再評価していきたい。

Notes

- (1) Sandra Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic*, p. 399.
- (2) Sandra Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic*, pp. 325–326.
- (3) ヘレンのモデルについては、中岡洋『ブロンテ姉妹の時空——三大作品の再評価』84頁を参照した。

参考文献

- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Edited by Deborah Lutz, Norton Critical Editions, 2016.
- . *Villette*. Edited with an Introduction and Notes by Helen M. Cooper, Penguin, 2004.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. Yale University Press, 1979.
- Jacobus, Mary. *Reading Women: Essays in Feminist Criticism*. Columbia University Press, 1986.
- O'Dea, Gregory S. "Narrator and Reader in Charlotte Brontë's *Villette*." *South Atlantic Review*, vol. 53, no. 1, 1988, pp. 41–57.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own and Three Guineas*. Penguin Books, 1993.
- . "Jane Eyre and Wuthering Heights." *Collected Essays*, vol. 1, by Virginia Woolf, The Hogarth Press, 1924, pp. 185–90.
- 中岡洋『ブロンテ姉妹の時空——三大作品の再評価』北星堂書店、1997年。